

たかなべ

風俗・風習

ふるさとを伝える会
高鍋町教育委員会

はじめに

高鍋の地は児湯地方の中心として古い歴史と豊かな自然環境に恵まれて栄えてきました。

長い歴史の中で尊い遺産として培われた伝承、生活に根ざした故事、それぞれの場所にまつわる請れや伝説、民話などが語り継がれてまいりました。

しかし、時代の流れとともにそうした遺産は、いつしか人々から忘れ去られ消えていくものもたくさんあるようです。

幸い、高齢者ボランティア活動として「ふるさとを伝える会」で伝承文化の収集と整理を意欲的に取り組んで頂き、すでに第四集まで発刊し、数多くの方々から読み親しんでいただきました。

本年度は、第五集として、高鍋地方に伝わる風俗、風習について発刊されることとなり喜びに堪えません。

町内に伝承されている風俗・風習について頼みとする古老も数少なく、高齢者を訪問しての聴取・古い文集等

の現代文への書き直し等、地味なお仕事の連続でご苦労があったとお察しいたします。

各地に伝えられた貴重な資料をまとめられ次の世代へ伝えていただくことは意義あることと存じます。

年行事事も現在では数少ない地方のみに限ぎられ寂しさを感じます。

ここに第五集を刊行にあたり資料をご提供いただきました方々、編集にたずさわっていただいた方々、社会教育課の各位に心から感謝申し上げます、あわせて今後の協力をお願いいたします。

平成六年三月

高鍋町教育委員会

教育長 岩 永 高 徳

目次

第一部 婚姻・葬

○ 嫁入り……………	奥村ヤエ子	1
○ 嫁入り……………	平山 ツヤ	4
○ 地藏さん抱かせ……………	岡本 忠司	6
○ 六日町の講……………	六日町永代誌より	7
○ 代参講……………	六日町永代誌より	9
○ 茶入「結納」……………	森 阿弥子	10
○ 上町の葬儀……………	松尾 春子	12
○ 六日町の葬儀……………	六日町永代誌	14
○ 葬儀の執行……………	永友 千秋	16

第二部 生育・厄払い・祝い・生活

○ 誕生の前後……………	林 ツタエ	24
○ 出産……………	工藤ハツ子	25
○ ひな祭……………	則松ヒサノ	27
○ たごし……………	森 仲吉	28

第三部 年中行事

○ 商品卸……………	猪上幾太郎	30
○ 初商……………	渋谷ミツヨ	31
○ 矢市（ごんぼ市）……………	西方 文子	32
○ 歩き初め……………	山添ミサヨ	33

○ 社日講・いのこ餅……………	前田 重信	34
○ 雨乞い……………	前田 重信	36
○ お盆……………	小寺 信利	37
○ 年賀……………	小寺 信利	40
○ 精霊さんへのお供え……………	津江 幸子	41
○ 祈念と十五夜綱引き……………	西森 清春	43
○ もぐら打ち……………	阪本 高夫	45
○ 駄祈禱……………	永友 藤男	46
○ お接待……………	紙屋 シマ 黒木みさ子	49
○ 正月祝いと神祭り……………	本田 親徳	50
○ 正月行事……………	手塚 貞夫	52
○ 十五夜祭……………	山下 重秋	56
○ 昔の農業……………	林 ツタエ	59

○ 百度めり……………	森	仲吉	60
○ 農機具のうつりかわり……………	原	重隆	62
○ 三社参り……………	赤澤	実	65
○ 三社参りの思い出……………	吉松ハナ子		66
○ 庚申講について……………	則松	万年	67
○ もちつき……………	中山	繁	71
○ 高鍋城の年末・年始について……………	中武	弘	72

第四部 生産

○ 白髭さと農民……………	原	重隆	75
○ 千石船の進水……………	久保田悦郎		76
○ 酒造り……………	金丸	益雄	77
○ 建築について……………	坂本	高雄	81
○ 水守について……………	百武	熊太	84

附

高鍋町風俗行事に関するアンケート調査結果…	86
(平成四年度)	

第一部 婚姻・葬

嫁入り

大工小路 奥村 ヤエ子

昔は、この頃の若い人達のように、誰はばかることなく自由な恋愛を楽しみ、好きな人と結婚するなど想像もできないことでした。大概は「どこそこがいい娘が居るが、どんげじゃろかい、様子を見て来てくれんどかい、会わしちみろうや」と、親戚の者や近所の人が話を持ってきたものです。そして、双方を知っている方に頼んでそれとなく調べてきてもらい、本人達の意見を聞く事など全く無く話が進められたものです。このようにして話が進められ、見合いをし結婚に至っていたわけですが、その場所場所により、しきたりも多少異なっていたと思いますので、私の時の場合を例にして述べてみます。

(1) 見合いのこと

今から六十数年前の話です。昭和二、三年頃の秋、稲の取り入れも近づいたある日のこと、この土地の大地主であり、人望も厚い柿原さんが「新聞を見せんか。」と、

ひょっこりとやって来られました。「うちの新聞は郵便で来るから、今日はまだ来てませんよ」と言いましたら、「二、三日遅れでいいが。」と言い、暫く世間話などして帰られました。その頃は新聞を取っている家はまだ少なく、郵便で配達されていたものです。それにしても、大地主の柿原さんが、新聞をとっていない筈はなく、後から考えると、あれが様子見だったのでしょうか。しばらくして、柿原さんから私の両親に結婚話が持ち込まれたのですから……。

私の両親は、男の子二人の後に生まれた女の子なので、とても大事にし、可愛がってくれていましたから、まだ結婚はさせないと断ったそうです。でも先方の、後に私の姑しゅうととなる方がえらく気に入ってくれて、私の家に日参したそうです。それで、両親もとうとう根負けして私を嫁に出すことにしたそうです。本人同士はろくすっぽ顔も合わせず、気に入ったかどうかもわからないのに、姑の方が気に入ったのですから、姑と見合いしたようなものです。結婚式が済んで何日かして、私の婿むこさんはこんな顔をしたりやったもんじゃと、よくよく眺めたも

のです。今の若い人達からみると嘘のような話ですが、本当です。

(2) 結納^{いのち}（茶入れ）のこと

いよいよ両者の話がまとまったら茶入れとなります。茶入れというのは、結納のことですが、これは、今も昔もそれ程の変わりはないと思います。

男の方が仲立ちを立て、両親と近親の者二名位で女性の家に行くのです。

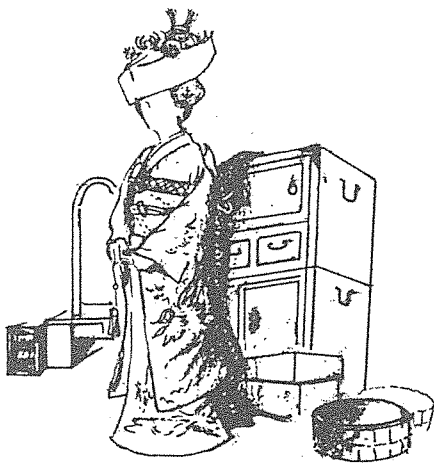
私の時の仲立ちさんは金沢さんという人でした。先程の柿原さんは仲立ちではなく、導きどん或は、樽かえどんと言われ、話のまとめ役といったところだったのでしよう。

さて、茶入れには、三段重の重箱に刺身、煮付け、米、茶等を詰め、酒、鯛の魚、それに支度金を持参して来られました。支度金は確か十円位だったと思います。昭和三年頃の十円ですから、今ならどの位になるのでしょうか。鯛の魚は、その場で半分刺身にして食べさせるのですが、こんな事は、今も行われておりますね。

(3) 持参金、嫁入り道具のこと

持参金については、その頃みんながそうしていたわけではないと思います。

私の場合は、信用組合の通い帳に十円位、えらい沢山だった記憶がありますので、もしかしたら三十円位でした。姑さんから金を十分貰えん時に使いなさいというのでした。この金がどれ程役立ったことか、親の有難さが身に染みたものです。別に母親が、五十錢玉を五枚内緒で渡してくれました。「どうしても手にゃわんで、首でもくらんならん、という時に使え」と渡してくれたのですが、それはとうとう使わず終いでした。



嫁入り道具ですが、タンス、長持、鉄箱、上だらい、下だらい、普通のたらいを持たせてもらいました。又、父は、刀を一振渡しました。武士の

家から嫁ぐのだし、長女だからと、特に仕分けのつもりで持たせてくれたものと思います。又、姑に反物数本、おじ、おばさん宅へは反物一本と下駄を差し上げたものです。

(4) 結婚式のこと

いよいよ結婚式となりますが、今のように結婚式場で挙式し、披露宴を行う、というのではありませんでした。婚家の地区の人達総出で手料理し、婚家の座敷で祝って貰ったものです。もともと、今もこのように祝うところもあります。昔は皆このようでした。

私は、新田^{にゅうた}三財原の実家から、富田を通り水谷原を通って、高鍋光音寺の稼ぎ先まで歩いて嫁入りしました。今のようなりっぱな道でなく、凹凸の砂利道を、髪は高島田に角かくし、着物姿にカップリ下駄でそろそろと歩いて行くのですから、大変難儀でした。今考えると、よう歩いていったものです。

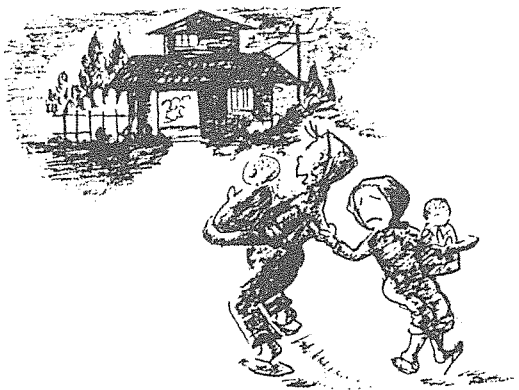
でも、私は、水谷原からタクシーに乗ることができ、ホッとしたことを覚えています。

その頃、タクシーは高鍋に二台位しか無く、やっと水

谷原まで迎えに来てくれたのでした。稼ぎ先では、玄関から入らず台所から入ったのを覚えています。なぜ？それは、今日からこの家族の一員であり、主婦となることを意味しているのです。

この頃の結婚式で、今と比べて特に変わった事としては、花嫁さんに石の地蔵を抱かせる風習がありました。これは、『お嫁さんがいつまでも、その家にどっしりと腰を据えて居付いて欲しい。』という願いが込められていたようです。

私の時も抱かせてもらいました。村の人総出の祝儀ですから、座敷ばかりでなく、庭にまでむしろを敷き、酒や肴を振舞ったものです。その宴たけなわの折、ほかおぶりした村の



若者達から、何処から持って来たのか、二つの地蔵さんを抱かせて貰いました。後日、元の所に返さなければならぬのに、何処に返してよいか分からず困ったものです。

それから夜中の十二時頃になると、皆に追酒を振舞って、ようやく祝宴が終り、皆を門口まで送り出して帰ってもらったものです。

今、私の人生を振り返ってみますと、結婚して数年後に、日中戦争で夫を亡くしてしまいましたから、花嫁行列の時のように、前半は大変辛苦の多い道程でした。でも後半は、石の地蔵さんを二つも抱かせて貰ったお蔭か、今もまだ、しっかりと家に腰を据えており、幸せな道を歩んでおります。

嫁入り

西平原 平山ツヤ

縁あって大正十四年、私は高鍋に嫁いで来ました。

いよいよ結婚式の当日です。私は朝早く起き自分の家に髪結いさんに来てもらい「島田」に結いました。当時の女性には長い髪をしていて「島田・丸髷まるまげ」にも結えませんでした。

やがて時間になると、高鍋から迎えの方が来られ、私は都農の親類と共に家から十分位歩いて車に乗りました。途中道筋の皆さんにお祝いを言っていたきました。

高鍋では先ず「おてつき」といって、中島地区の仲人さんである橋口さん宅へお邪魔しました。ここでお茶をいただき、着物・化粧を直しほったのを覚えています。「おてつき」とはよくいったものです。

ほどなく婿方から迎えがたくさんお見えになり、私は十分位歩いて平山の台所から家に入りました。花嫁は台所からという習わしでありました。

このとき、都農からずっと私に付き添ってくれたもう一人の花嫁がおりました。私の従姉妹いとこですが「側嫁そばよめ」



ともなりました。

実は私もこの「側嫁女」の経験がありました。当時は夫となる人を十分に知っているわけではないし、嫁入りとなると不安一杯でした。このため、親しい友人・親類の娘さんに頼んで側に付き添ってもらったのが「側嫁女」です。お蔭様で、私は隣りに従姉妹が付き添ってくれて心強かったのを覚えています。これは、昔の人の花嫁に対する思いやりと知恵といえるのではないのでしょうか。

「側嫁女」になると、皆さんに知っていただく機会も増え、貰い手がかかり早く結婚できたといわれておりま

女」といって私と同じように「島田」に結い、衣装もつけ、化粧もして、花嫁が二人連れといった感じでした。歩くのも車も「おてつき」も一緒の行事で、道で出合う人々の話題

した。現在の結婚式のときの花嫁さんと昔の花嫁さんを見て世の中の移り変わりの激しさを感じます。

やがて三々九度も終り披露宴となりましたが、都農の親戚の席に「側嫁女」が座り祝福してくれていて安堵したものです。

次は嫁入りのときの持参品に触れます。今と違って電気が昼夜来ているわけではなく、やっと電燈がとる頃です。で電化製品とて考えられない時代です。嫁入り道具もずい分と違っていました。

- (1) 簞笥 (2) 布団 (長持に入れて)
- (3) 柳行李 (4) 欵箱 (5) 鏡台
- (6) たらい (上下)

この品々を前の日に都農から高鍋まで、荷馬車でゴトゴトと一日かけて運び込んだものです。そして結婚の翌日座敷に並べて隣近所の方々に見てもらいました。嫁入道具をみんなから見てもうそんな習わしがありました。私は翌日朝早く髪結いに行き島田から丸髷にかえました。

また、実家の母や叔母達は娘が寂しかろうということ
で婚家に来てくれ、隣近所へ「どうぞよろしく願いま
す」と挨拶廻りをしてくれました。

地蔵さん抱かせ

蚊口中 岡本忠司

昭和十年、私が十八歳の頃の話です。

「何日は菊次郎さんとこは嫁入りじゃげな」という話が
青年の間で伝わりました。

いよいよ当日のことです。大工仕事が進んで帰ろうと
している私に、よく面倒をみてくれる先輩が近寄って来
ました。

「おい、今晚嫁入りの家へ祝いに行くかり、家で待っ
ちよけ。俺が迎えに来るかりね。手拭がいっど。そりか
り、こりゃ誰にも言わんとど」とささやきました。私は
何のことかよく分かりませんでしたが、先輩達が嫁入り
のある家へ地蔵さんを持って出向くという風習があるの
は聞いていましたので、私も連れて行って貰えるのだな
と察しました。

私は言われたとおり誰にも言わず、夜先輩が来るのを
待ちました。

いよいよ辺りが暗くなったときです。「おい、いくど、
ついちこい」と縁側で小声がしました。私は先輩ちつ
ていきました。少し行くと先輩は「岡本は下にある地
蔵を抱えち来い。俺や上ん地蔵さんを借っち来るかり
ここで待っちよれ」と言います。

私は蚊口下に鎮座する地蔵さんへ行き、他に見ている
人のいないを確かめ横抱きにして先輩の言った所へ急ぎ
ました。先輩は既に地蔵さんを抱えて待っていました。

「うん、来たか。ふかぶりすつとじゃ。俺が先に行き
地蔵さんを嫁女よめじょに抱かすかり、お前も俺がしたごつす
りゃいいが」と言い、暗がりを祝宴がまっている家へ歩
き始めました。その家ではもうお祝いが始まっており賑
やかでした。

先輩は縁側から入り、花婿・花嫁の座っているところ
へ地蔵さんを抱え進みました。そして無言のまま花嫁の
膝へ地蔵さんを置き抱かせました。花嫁は予告なしに
入って来た青年に無言で地蔵さんを抱かされてびっくり

仰天です。私は先輩の横でこの有様を眺めていてびっくりしました。先輩が小声で「おい、今度はお前じゃ」と言うので、私も地蔵さんを花嫁に抱かせました。

そのときです。「地蔵さんが来やったど、めでてこっちゃ」と誰かが言うのと、一座の人々は手をたたきはやしたてました。

先輩はなおも無言で私を促し縁側から外へ出ました。帰ろうとしていると、裏手から年輩の女性が焼酎一本を「今夜は祝いに来てもちご苦労さんじゃったの。おきん」と言っただけしてくれました。先輩は「おめでとさんで」と初めて口をきき受取りました。

このようにして、花嫁への地蔵さん渡しは終わりました。貰った焼酎は先輩の仲間と一緒に飲み、話がはずみ



ました。

私はこの「しきたり」が忘れられず、以後何回も「地蔵さん抱かせ」を続けたものです。

※ふかぶり＝頬かぶりの方言で、手拭を頭からすっぽりとかぶること。

六日町の講

六日町永代誌より

六日町は昔から今日までみなさんの協力によって、すばらしい運営がなされ、歴史と特色をもっています。

特に六日町には、講と名づけられたものがあり、年月を経て少しずつ違ってはきているもののそれが受け継がれてきました。

代参講（三社詣）と念仏講については別記のとおりなので省略し、ここでは明治三十八年から記録が残っている講を紹介します。

六日町の第一回の講は、明治三十八年旧暦十一月二十七日に火産靈神社で『火産靈講』として開かれました。今でいう自治公民館活動的なもので、『組合の交宜を暖

める為、且つ町事共議の為』とうたっております。そして、組合世話人・衛生委員を選出していますし、会合の後、会費十五銭で宴会をしたとあります。四十二戸で出発しています。

この講も年を経る毎に回数を増し、名称も変わっていききました。

第二回は明治三十九年ですが、一月三十日に蛭子講の名のもとに開かれ、一年三回の講が決定しています。即ち

- (一)正月二十日 蛭子講(のち恵比寿講と改称)
- (二)十一月三日 天長講(明治天皇誕生日)
- (三)十一月二十七日 火産靈神社講

また代参講が決定し、月十五銭程度の積立てで個人では行けない神社仏閣などのお詣りが組織的に行われることになりました。

この他に、明治四十年旧十月になると、町内の四社即ち、鶴戸・愛宕・舞鶴・八坂の神社に六日町々民一同でお詣りするようになっていきます。

そして明治四十三年には、更に富田(現新富町)の日

置水神社を加え五社詣りとなりました。

このように六日町では、講と宮詣りが毎年欠くることなく続く基礎ができたのです。

大正時代になりますと、自ら天長講が大正天皇の誕生日の十一月三十日となり、今までの十一月三日を明治節講といたしております。

また、昭和になると、天長講は四月二十九日に変更になったのは当然のことで、年に三度の講は明治から大正、昭和へと引継がれました。そして日中戦争中も続けられました。昭和十五年は、日中戦争から太平洋戦争へ移る前の年ですが、国の方針から六日町にも「常会」が創立され、また五人組編成(隣組)も協議され、講と異なる組織にとまどったものでした。終戦になるや、集会の禁止が占領軍から達せられ、隣組は勿論、長い間続いていた講も消えることになりました。

しかし、六日町に存在した講の精神は、戦争後安定期を迎えると共に公民館活動の基本となり、私達、六日町住民の絆となっています。

代参講

六日町 永代誌より

六日町はよんで字の如く六日に市が開かれた町であり、古くからいろいろな行事が永く続いている町です。

中でも代参講（三社詣りといっている）は、各戸が費用を積立てておき、交代で神社等へお参りするもので、この講はずい分前から行われていたようですが、六日町に保管されている明治三十八年起「六日町永代帳」によって、講の移り変わりをたどってみました。

○ 六日町の代参講は明治三十八年には行われているのですが、代参人の抽選ちゅうせんがあったとあるだけで残念ながら行先は不明です。

はつきりしているのは次からです。

一、明治四十年〜大正十年（十五年間）

（二）霧島神宮 旧九月七日〜十日

（一）鶴戸神宮 旧三月十五日〜十七日

（三）宇納間神社 旧十一月十五日〜十七日

当時四十三戸の六日町の人々は、各戸から十五銭〜二

十銭を出し、抽選で二名宛の代参人を正月の恵比寿講で決定

二、大正十一年〜昭和元年（五年間）

（一）宇佐八幡 三月十五日出発

（二）太宰府天満宮 五月十日 出発

（三）熊本清正公 十月十日 出発

この講の費用として各戸毎月十銭を集金し、参詣の際更に一戸当たり五十銭を集金、各代参とも二名宛一人に十七円支給

三、昭和二年〜昭和六年（五年間）

（一）善通寺

（二）厳嶋神社

代参所は変わらないが、一回当たり昭二〇三名、

昭三〇二名、昭六〇三名

四、昭和七年〜昭和十二年（六年間）

（一）宇納間地藏尊

(二) 鵜戸神宮

費用は各戸毎月二十銭集金し、代参者へ一人宛五円八十銭支給、代参人数は年に六名

五、昭和十三年～昭和十六年（四年間）

- (一) 都農一の宮神社
- (二) 美々津立磐神社
- (三) 天の岩戸神社

毎月一戸十銭集金

昭十三年～昭十五年―毎月六名

昭十六年―七名

昭和十七年（太平洋戦争開始の翌年）には戦争の影響のためか、代参講は実施されず、これで六日町の代参講の記録は終わっています。

戦後は混乱の時代でもあり代参講は実施し難く、そして高度成長期に入ると観光旅行が自由に出来るようになり、また世の移りと相まって代参講はその役目を終り姿を消したものと考えます。

茶入「結納」

牛牧 森 阿弥子

先ず最初に嫁貰い。この嫁貰いという仲人の役割仲々味なものである。若い男女を結びつける楽しみ。今ももう二人の恋愛で出来上がってるのに形式的に結納をという様な感じもある。昔の様に嫁さんの初々しい恥じらいも感じられないし、先方がやり惜しみされるのを無理に頭を下げて「ウン」という返事があるまで、なければ三日三晩でも通うの意気込みの仲人だった。勿論貰う側の意志の強さでこうなるのだけれど、又々先方も、大事な大事な娘をやるんだからと簡単に「ウン」とはいつて貰えないのは当然である。あれこれと話が色々盛り上がる。やっと「それじゃ」の返事が返って来ればもう出来上がり。茶入れと進展して行く。日取り決めが盛り上がる。そしてやっとの事、何日何日の良き日にと茶入の日が予定される。

俗に結納の事を茶入といっていた。

「話聞いたっけけどあそこの誰それさんは茶入があったっちゃろかい」「ウン、ウンもう茶入があったげな」

「フーン、式は何日じゃろかい」「結納金はいくらじゃったっちゃろかい」よくよく気になる噂話である。

さてその茶入の事である。所変われば品変わるで色々の風習がある。普通なら結納セットを求めてそれに酒肴酒は焼酎であつたり又、「角樽を添え」鯛二匹「めでたいの意味」で女鯛男鯛を〆縄につけ嫁さん息子さんと戴きに行く。また前もって何日何日は日がよいからその日に茶入れさせて貰いたいとか色々の打ち合わせがある。勿論先方「娘さん側」の意見を尊重して大事に大事に事を運ぶ。先方の媒酌人との打ち合わせも大変である。一番大事な結納金の話し合いも有るし。

さて当日「今日はお日柄もよろしく娘さんを戴きに参りました。お茶入れさせて戴きます」と酒肴の例の結納セットを目録の順番に並べる。そして三段重には、米、さしみ、煮物と重箱を差し出す。

ここでセットの中身を紹介します。

「縁起ものの言葉」

七品の場合

九品の場合

目録書

目録書

友	末	昆	寿	金	奨
白	広	布	留	宝	斗
賀			女	包	
					長
				金	奨
			勝	宝	斗
			男	包	
			節		
		寿	留		
		女			
	末	昆	布		
	広				
友					
白					
賀					

家内喜多留

目録の書き方にも婿から嫁へには御帶料と書き、嫁から婿へは御袴料と書き、右之通幾久敷芽出度御受納されたく候

〇〇太郎

〇〇花子様

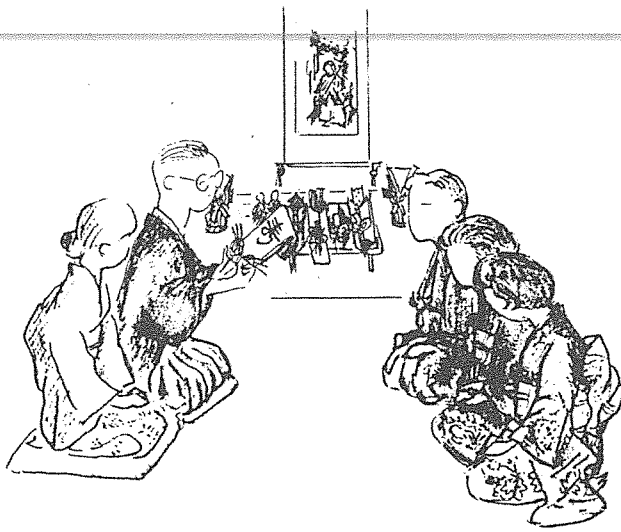
風変りな風習に、この酒肴に結納セットと裸の鶏を添え、それに米、お茶を入れたお重を差出す

双方共「お茶入れが出来た、めでたし、めでたし」で話はずむ。そろそろ式の日取りもと話が進んで行く。早いところではこの茶入れ日に結婚式の日取迄決まるところがある。

若い二人の胸ふくらむ最良の日である。
両家共、よろこび安堵感で話はずむ。

頃合を見計らって、娘さんがお茶を入れて皆に差出す。
そしてこれでおひらきとなるのである。

思うにこれがお茶入れの言葉の由縁ではないだろうか。



上町の葬儀

上町 松尾 春子

私が嫁に來た昭和の初め、上町は三十戸程でした。結婚や葬儀は上町が二班に分かれ、手伝いをする「しきたり」となっていました。ここでは葬儀について紹介いたします。

死者が出ると身内は大変でした。悲しみのうちに、隣近所へあいさつをなし葬儀全般の執行について依頼しました。今は葬儀社などへ依頼するので身内や地区の方々の仕事は減っているようですが、私が姑を葬ったときはいろいろありました。主だったものを書いてみます。

(一) 死葬束作り

枕辺に身内の女性が集まり、白のさらし木綿を裁って死者に着せる着物を作る。この場合縫目から糸の端の方を二寸(六センチ)程出し留め玉を作らないようにする。

(二) 死者があゝの世の川(三途の川)を渡るために必要なお金を持たせるならわしがあった。このお金を袋に入れ

首から吊し胸に置いていたが、この袋も枕辺で縫った。

(三) 湯灌

縁側で、お湯を入れた「たらい」に死者を入れ体を洗い拭き清める。この場合適温のお湯にするとき、水に熱湯を注ぐものといわれていた。

(四) 衣類干し

死者の着ていた衣類を「たらい」に浸し、しばらく置いて「えもんかけ」に掛けて陰干しにした。

一方、死者が出た班の人々も大変でした。「亡くなりました。どうぞよろしく願います」とのあいさつがあると、すぐ近所の男女が集まり、「枕めし」を先ず炊き供え、係の分担を話し合い、夫々の準備にかかったものです。お通夜まで時間はなく皆さんの協力なくしては出来ないものでした。係の分担については、詳しく六日町の話にのっていますので省略します。

死者の出た家・親類の人達は台所に立たないしきたりです。朝昼晩、出立の準備を全て班の女性の手ではなくてはならず、親類の人数が多いときなどはてんでこ

舞させられたものです。

今は、スーパーマーケットへ行けば材料はほとんど揃いますが、私達が町内で食事の準備をするときは、里芋・ごぼうの皮むきから始めていたので時間もかかりました。仕出し屋から食事を取っている平成の皆さんには到底お分かりにはならないことでしょう。しかし、町の人は先輩の知恵を引き継ぎ協力し能率よく仕事をこなしたものです。

ご存じの方はわかりのように高鍋の町は一戸が半カ畝といわれる建物です。間口二間半（五メートル）、奥行二四間（四八メートル）の土地で東西に長く伸び通路が三尺（一メートル）でしたので、係仕事に追われ小走りに行き交い大変でした。

私達の上町には行事用の「会席膳」の備えがありました。上町の二班に夫々二十膳だったと記憶します。一膳当たり五品の碗や皿があり、量も多く大きな箱に保管していました。葬儀のあった家が保管することとなっていて、死者があったらそこへ取りに行き使用しました。大きな箱から碗や皿を取り出し、拭いては「ざる」に並べ

るのも一仕事でした。

このようにして、昔はお互いの協力で葬儀を執り行いました。

六日町の葬儀

六日町永代誌

死人が出ると、どこでもそうでしょうが集落挙げてお葬をしました。今でもその風習は続いています。が、今のように便利でなかったので、時間をかけ町の人々が役割を分担しその準備をしました。明治三十九年の記録によりますと次のようにあります。

明治三十九年四月ヨリ、当組合ノ葬儀ノ際左ノ如ク議決シタリ

一、旧例ヲ取り念仏講トシテ組合員一同ヨリ（当時ノ玄米壹升代）金員ヲ徴収スル事

一、各組合人ハ左ノ通り役割ス、依テ葬儀ハ当日必ズ自己ノ任務ニ服従スル事

○総監督係 ○役場・医師係 ○池堀係

○大工係 ○行列係 ○会計係

○雑用係 ○買物係

ここで出てくる組合人とは当時の六日町の戸主を言い、葬儀の折はこの人達によって運営されていました。女性は、炊事全般を受け持ったり、掃除等にかかわっていました。

大工、雑用役は手間と能力が必要な仕事で（材料から求めて完成させる必要があった。今のようにすぐ現金で買うということはなかった）この係は自ら定まっていた傾向がみられます。

細かく次のような係がありました。

仏式の場合

天蓋・龍頭・卍（マンジ）・巴（トモエ）・ツバメ・

三日仏・杖・松脂・たすき縄・竹巻藁・乗矩・供物（菓子）

神式の場合

神・色紙・供物（酒・洗米・魚・菓子・野菜・昆布）

神仏共通

棺・花輪花籠・花立・箸・玉屋・旗・幟・提灯・帳簿
 葬儀の準備は、当時四十三戸の六日町の人々が手分け
 し二日がかりの手作業だったようですし、この人々の食
 事（飲物・昼食）の世話、併せて「死者の身内は炊事を
 しないという慣習によって、亡くなると同時に身内の
 方々の食事の世話も加わり、賄方の女性のご苦労も大変
 だったようです。

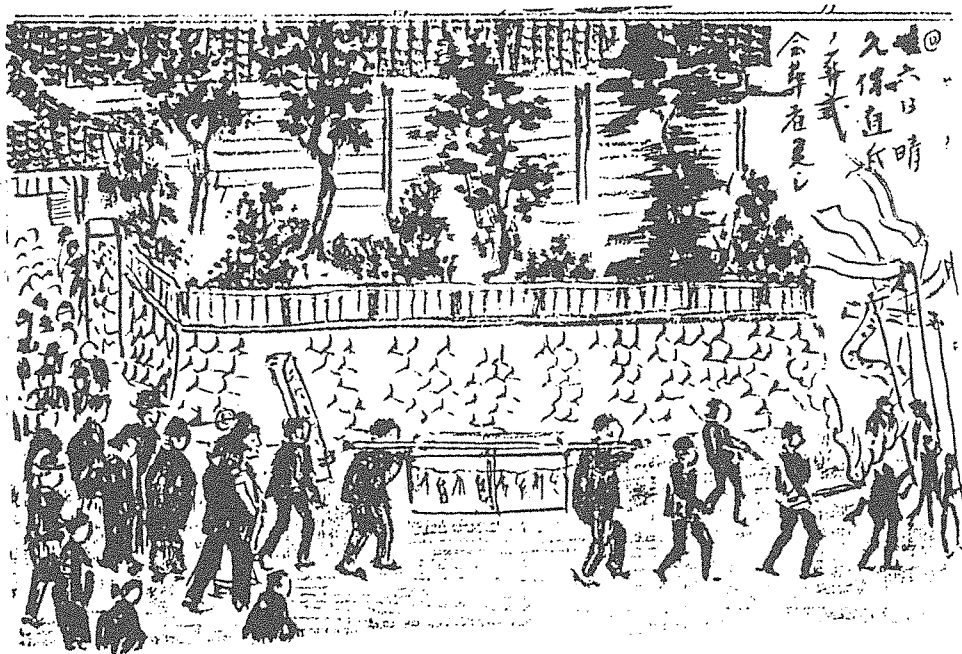
いよいよ出棺となりますと次のような行列が組まれ土
 葬場へと向かいました。

神式の場合

白杖——松明——大櫛——五色旗——弔旗——造花——生花——神
 饌——齊主（神官）——銘旗——柩——杖——沓——墓標——喪主——親
 族——会葬者

仏式の場合

松明——杖（草履付）——野辺帳——花籠——白張提灯——名号
 旗——弔旗——花輪——生花——小旗（青黄赤黒白紫）——死花——
 燭台——供物——僧侶——大傘——曲録——墓標——位牌——銘旗——棺
 ——喪主——親族——会葬者



神式の場合も、仏式の場合も（当時の六日町には他の宗教はなかった）今のように墓地までみんな歩きまわした。六日町の各戸の墓地は、元祇園・欄干・砂子田でしたので、約一キロメートル余はあり、お墓まで十々十五分はかかっていたようです。行列の係は前記のとおり定まっていたましたが、小旗持ちは子供の役目となっていました。

会葬者が多いと、行列は百メートルにも及んだと古老は語っています。

途中の家々では葬列が近づく、家の前に出て、両手を合わせ故人の冥福をお祈りいたしました。

墓地に着くと、どこも棺を置く台（石やセメント製）があり、そこに棺を安置し灯をともし、線香をたき、神主の祝詞、僧侶の読経がありました。そして、遺族・参列者一人ひとりが最後のお別れをしたものです。

最後に遺族代表の挨拶があり葬儀は終了でした。帰るときは、今来た道は通らないという習慣があり、三々五々家路についたものです。

葬儀の執行

家床 永友千秋

一、遺体の安置

死者の遺体は安置部屋の一番上座に移し、北枕に寝かせ、白布で顔をおおい、枕飯を供えた。枕飯というのは白米で茶碗一杯分を炊いて、その全部をいつも使っていた飯碗に逆さに移しかえて盛りあげ、その真中に箸を突き立て枕元に備えるもので、納棺の際白紙に包んで棺に入れる。神道では米、塩、水を供える。不浄を入れないため、神棚、床の間に白紙を貼り、揭示してある写真、賞状、表彰状、感謝状等の額も皆白紙でおう。

病院とか自宅以外での死亡の時は、昔は戸板等で急造したタゴシで隣組の者数名でかつぎ帰ったものであるが、今日では自動車で運んでいる。特に遠方の場合には火葬して遺骨で迎えることもある。

二、連絡・通夜

家族に死者が出たら、喪主は取急ぎ隣近所（葬儀講